HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	若者支援施設における探索的参加 ： ロビー空間に着目して
Author(s)	大津, 恵実
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 137, 113-136
Issue Date	2020-12-23
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.137.113
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80278
Type	departmental bulletin paper
File Information	09-1882-1669-137.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院紀要
第137号　2020年12月

若者支援施設における探索的参加

―ロビー空間に着目して―

大　津　恵　実*

はじめに
1. 若者の参加をどのように捉えるか
2. 実践共同体概念の拡張可能性：正統的周辺参加論の観点から
3. 課題設定および調査の概要
（1）考察課題
（2）Aセンターの概要
（3）調査の概要
4. ロビー空間における日常的な意味交渉過程
（1）自由な場・寛容な場への戸惑い
（2）職員による「余白」を残す場づくり
（3）小括
5. ユーザー会議における探索的参加の過程及び成員性の深化
（1）ユーザー会議の開催について
（2）ユーザー会議への多様な参加形態
（3）成員性の深化
おわりに
【キーワード】参加，ロビー空間，若者，若者支援施設，実践共同体

はじめに

本論文は，若者支援施設のロビー空間に着目し，参加者自身が参加の仕方を考え作り出していく探索的参加の過程を明らかにすることを目的としている。

青少年・若者を対象とする教育施設は，1980年代以降の青少年の集団離れという変化の中で大きな転換を遂げた。それまでは集団利用が前提であったが，個人利用もできるタイプの場づくり・施設づくり[1]や利用対象年齢の拡大など時代の変化に対応した運営が行われるようになった。ロビーという予約せずに自由に過ごすことのできるフリースペースはそうした傾向を象徴的に表している。空間を広く開放したり，個別スペースをつくるなどして，一人で勉強をしにくる浪人生，待ち合わせのカップル，部屋利用の時間を待っているサークル団体，放課後集まる高校生などさまざまな人が利用できるようにロビー空間[2]を確保する施設が増えてきた。このようなロビーで若者たちと関わる職員・スタッフの「ロビーワーク」は単なる若者とのコミュニケーションではなく，職員の業務として位置づけられている。ロビーワークでは職員が意図的に若者との関わりを持ち，進路や恋愛の相談に乗ったり，施設の活動・講座に誘うことによって，広い意味でのカウンセリングやガイダンス，グループワーク

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程
DOI：10.14943/b.edu.137.113

の機能があり，若者のニーズのリサーチの場となっている[3]。

ロビー[4]はそこでの振る舞い方，過ごし方が決められていないからこそ，多様な目的を持った利用者が集う場であり，職員にとっても若者の素に近い状態に関わることができる場として把握されている。しかし，ロビーは単に素でいられる場にとどまらない意義を有する。ロビー利用者は共通の関心や目的を持って集まったメンバーではないが，時間と空間を共有しており，積極的な交流にまで至らない相互作用が起こっている。筆者は若者支援施設のロビーにおいて参与観察を行う中で，彼らがロビーを利用する過程で確かに気づき，学んでいることがあると実感している。そのような若者の学習をどのように捉えれば良いのか。

この学習は，ワーカーの意図によって構成された場において生じている。しかし，そこで行われている支援者と利用者の関係性は，知識を詰め込むような銀行型教育でも，団体型の関わりでも，サークル型の関わりでもない。本論文では，その学習を参加との関わりで検討してみたい。参加の深まりは主体の変化と関わり，その変化は何等かの学習がもたらしたものといえる。しかし，参加についても，その把握方法についての検討が必要である。

これまで社会教育における子ども・若者の参加に関する研究は，ロジャー・ハートによる「参画のはしご」論を中心に行われてきた。ハートは大人と子どもの関係性において，子どもの参加度を8段階に分けている。はしごの上段にいくほど，子どもが主体的に関わる程度が大きいことが示されている。1段目から3段目（「1. 操り参画」,「2. お飾り参画」,「3. 形だけの参画」）までは参画と呼べるものではなく，避けるべきものと述べられている。そして，第4段から上が子どもが実質的に参加している状態であるが，第4段は子どもが大人の指示に従う「役割参加」，第5段は意見を自由に言える「意見参加」，第6段は大人と子どもが納得してものごとを決めていく「共同決定参加」である。子どもが主導権を持つ参加が第7段・8段である。第7段は「子どもがやりきる参加」であり，第8段は「大人を巻き込む参加」である[5]。

しかし，このような段階的な参加・参画論でロビーという場で生じている学習を捉えることは難しい。施設のロビーで過ごしている若者は，自分の意志でその場に来ており，そこでの過ごし方・振る舞い方を決めているのは若者自身ではあるが，単に彼らが都合良くその場を使っているだけという側面もある。したがって，そこに主体的な参加のイメージは見出し難い。中には，ロビーで築かれた職員との関係性をもとに施設でのイベント企画やまちづくりの会議に参加する若者もいるが，そのような関係性を築かず，単に場所を利用している人が大半である。ロビーに集う若者たちの存在からみれば，意思決定の場への参加をゴールとするような参加のプロセスは，それ自体が排除性を伴うものとなってしまっており，参加できる人とできない人の序列を生み出すものになってしまっているのではないか。

以上の問題意識に基づき，本論文では，ロビーにおける参加と学習の関連を事例検討を通して明らかにすることを課題とする。若者のロビーへの参加による学習の意味を明らかにすることが，青少年教育施設・若者支援施設の職員による緩い集団（ロビー型集団[6]）への関わりの意義を再評価することにもつながると考えている。

1. 若者の参加をどのように捉えるか

では，ハートによる「参画のはしご」論とは異なる参加の深まりをどのように捉えるのか。

ここでは社会教育における子ども・若者の参加，移行過程における参加を扱った先行研究からロビーの位置づけを確認する。

1970年代には，社会構造の変化に基づくとされた青少年問題の解決が目指され，青少年行政の中心的なテーマに「青少年の社会参加」が挙げられた。そこでは家庭，仲間集団，学校，職場，団体・グループ，コミュニティ，国家，国際社会への段階的な参加が示されており，既存の社会での「役割移行」に重点が置かれていた。それとは異なる視点で参加が議論されるようになった契機は，国連で1989年に「子どもの権利条約」が採択されたことである。子どもの権利条約は「子ども最優先の原則」のもとに「参加の権利」を位置づけ，「従来保護の対象としていた子どもを，権利を持つ主体として捉え直したこと」が特徴とされる。日本で批准される1994年前後から，従来の「青少年と社会参加」とは異なる視点から，「子どもの権利としての参加」の必要性が主張されてきた[7]。

新谷周平は1970年代の「青少年と社会参加」論やハートの「子どもの参画論」に対して，「これまでの参加・参画論は，形態として大人とのパートナーシップ，内容として社会的課題の解決を中心においてきている。しかし，実践上の問題は，そうした取り組みに対してそれほど多くの子ども・若者が，意欲的に参画してこないという点である。」[8]と指摘している。大人との共同参画，社会的課題解決を目的とした参画に関わる子ども・若者は一部である。新谷は，若者が形成する文化は多かれ少なかれ既存の社会，正統的な文化から一定の距離をとる考え方や行動様式を身につけるものであるため，それはある程度必然であると述べ，社会的課題の解決を全面に出さなくても，子ども・若者が「やりたいこと」を追求することを実現していくなかで，必然的に地域課題や社会的課題に結びついていく実践に注目している[9]。

例えば，杉並区児童青少年センター「ゆう杉並」では，利用者の中・高校生が運営に参画する中・高校生運営委員会がある。新谷は，中・高校生委員たちが考える「参画」と健全育成関係者の考える「社会参加」が異なるということ，そして委員になる中・高校生たちが単に自分たちのやりたいことの実現のために企画・運営を進めていくのではなく，他の多くの利用者の「やりたいこと」を実現することを目的とする新たな参画観に基づいた実践を取り上げている[10]。参画しない若者も含めて，多様な要求を満たす場や関係性をつくる参画論と言える。同時に，新谷は福田の論[11]を参照し，「参画ではとらえきれない個別的なニーズを聞き入れること＝意見表明権の保障こそ重要である」ことを確認している。参画において完全な代表制は確保されない。だからこそ，意見表明権への配慮が大人には求められるとしている[12]。すなわち新谷は誰もが要求を表明できる場をつくることが参画を実質化する条件であると指摘したと言える。

では，このような参画論を提起する新谷はロビーのような場への参加をどのように捉えていたのか。杉並区児童青少年センター「ゆう杉並」での観察とインタビューより，それぞれのニーズに合わせて施設の活動に「多様な距離のとり方」をする若者たちや，ある場や活動が「自分に合うものかどうかを丁寧に吟味しながら，徐々に組織的な活動へと参加していくプロセス」を検出した新谷は，その参加を「漸次的参加」[13]として描き出していた。「漸次的参加」の事例として，不登校の利用者が初めは一人や少人数でロビーにたまっていたが，職員や他の利用者を介して知り合いを広げ，施設内ダンスチームや施設の運営委員にもなっていった事例を取り上げており，ロビーを集団活動や組織的活動の入口として位置付けていた。

新谷は多様な参加者の要求やそれを保障する場づくりとして参加論を拡張したと言える。

しかし，ロビーをこのように集団活動・組織的活動の入口としての位置づけに留めており，ロビーでの学びに関しては，組織的活動への参加との関連で，相対的に評価するにとどまっている。すなわち，ロビーにおける参加に伴う学習の固有の意義は明らかにされていない。

この点に関わって，実践者からの報告や施設の調査報告書からは興味深い指摘がある。横浜市青少年交流センターの七澤淳子がロビーを「小さな『社会』」，「地域“らしきもの”」[14]と指摘していることは重要である。大人の利用も制限していないロビー空間では，自分の生活スペースでは出会わないような多様な世代の人たちが同じ空間を共有し，お互いの日常を垣間見ることで影響し合っている，そしてそのことが「同じ社会の一員」としての意識を形成していく[15]。七澤はロビーへの参加自体を若者の成長や学びにとって重要な機会と捉えており，若者を取り巻く社会の大人たちの認識も緩やかに変えていくものとして描いている。

また，京都市ユースサービス協会が行った，京都市青少年活動センターの利用者へのインタビュー調査[16]において，原は利用者にとってセンターが“曖昧さ”を伴った空間であったという点を重視する。「目的も，利用方法も，すべてが明確に定まった場所であったなら，利用や参加のあり方が無作為に拡大する可能性も，ワーカーが若者に働きかける機会も減退し，ユースワークを目の前の若者に即して展開する余地は著しく狭まるだろう」[17]と述べており，「“曖昧さ”を担保しながら可能性にひらかれたプロセスを生成する点」にユースワークの価値を見出している[18]。このように捉えると，ロビーは施設の中で最も利用の目的や方法が定められていないからこそ，その場への参加のあり方を自分自身で考え作り出していく可能性を持っているといえる。

さらに，この調査では「誰も排除しない」「若者を評価しない」「若者の選択と自己決定を大事にする」といった価値観がユースワークの中では大事にされていることが浮かび上がっていたが，その価値が〈場〉に埋め込まれているという点も指摘されていた[19]。そのような価値はワーカーが利用者に直接教え込んだわけではなく，「ユースワークが展開する〈場〉に身をひたすなかで，いつの間にか巻き込まれ，周りとともに〈わたし〉も影響しあうひとりとなっている」[20]。このような直接的に教えられたわけではないが，ユースワークの価値を学んでいるという学習の特質を解明することが，本論文で検討する探索的参加論の焦点になる。

この点に関わって阿比留は，参加／非参加の多様な在り方を保障する空間として「居場所」を位置付けている。参加論・関係論に基づけば，「『居場所』は一人でいる状態も，他者と共にいる状態も含みこむことができるために，非参加／参加の形態や関係性の構築についての許容度が高い」[21]と述べている。そして「居場所」を意識している青少年施設では，「スタッフのロビーワークによって，スタッフと利用者の関係が形成され，施設での活動に参加するようになったり，利用者同士の関係が築かれていく。成員性を徐々に獲得しながら，その場に参加し，役割を獲得していく「正統的周辺参加」が可能な空間が形成されているのである。成員性を獲得し，自分が認められる空間がつくられるという点で，その空間は「居場所」となりうる芽を持っている」[22]。

施設の中での具体的な役割の獲得や施設の中で営まれる活動への参加という，新谷の言う「漸次的参加」の過程としての捉え方に加え，阿比留はロビーで形成され，調整，変革されていく関係性を参加と捉えている[23]。

居場所としてのロビーにおける参加を成員性の獲得過程として把握することは，ロビー固有の学習過程を分析するための有効な視座を提供している。しかし，何をもって成員性の獲

得とするのかについては言及されていない。

以上，環境の変革主体形成を目指すハートの「参画のはしご論」に基づけば，参加できる／できないという序列を生み出してしまうことにつながりかねないことを確認した。青少年・若者の社会教育における参加・参画に関する先行研究より，ロビーのような場を新谷が描き出した「漸次的参加」の入口として捉えるだけではなく，ロビーに行く，居ることで必然的に生じる関係性の形成・調整の過程を，その人がその場のあり方や自身の振る舞い方を考え作りだしていく参加として積極的に位置づけることが必要ではないかと指摘した。本論文ではこのような参加の過程を探索的参加と捉える。ロビーという目的が曖昧な場に来る，そこで他者と時間・空間を共有して「居る」ということ自体を共同的な現象，参加の在り様としてどのように位置づけられるのか。そして阿比留の指摘より，「正統的周辺参加論」における「成員性」の捉え方を深めることの必要性が示唆された。

2. 実践共同体概念の拡張可能性：正統的周辺参加論の観点から

本章では，正統的周辺参加論を参照し，ロビー固有の探索的参加の学習過程を検討する際の視点を得る。

ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーの共著『状況に埋め込まれた学習』の中心的主張は，実践共同体への正統的周辺参加の過程を学習と捉えたことにある[24]。学習を「個人の頭の中での行為」と捉えるのではなく，社会・生活の活動に組み込まれ，具体的な状況の中でなされる行為として捉えるという提起はヴィゴツキーやデューイによりなされていたが，レイヴとウェンガーの「状況に埋め込まれた学習」論は大きな転換点となった。彼らは徒弟制の事例を通して，「実践（仕事）の周辺部の活動に従事し，実践共同体の中で役割や任務を変化・深化させていく過程で，実践者としてのアイデンティティを形成していく」[25]ことを発見した。

まず，「正統的周辺参加」という概念を確認しておく。参加の正統性について，「所属の仕方の本質を定める形式であり，それ故に，学習にとって決定的条件であるばかりでなく，その内容の構成要素でもある」[26]と述べられており「周辺的参加者」にも正統な成員性を付与している。レイヴとウェンガーは「周辺的参加」を以下のように定義している。

> *周辺性が示唆するのは，共同体によって限定された参加の場における存在には複数の，多様な，多くあるいは少なく関わったりつつみ込んだりする仕方があるということである。周辺的参加というのは社会的世界に位置づけられていることを示すことばである。変わりつづける参加の位置と見方こそが，行為者の学習の軌道（trajectories）であり，発達するアイデンティティであり，また成員性の形態でもある*[27]。

彼らは共同体への実践の一部への参加をも実践から「切り離された」ものではなく，すでに社会的世界・関係の一部であるという見方をしている。そしてこのように周辺的な参加者が向かっていくところを，「中心的参加」でもなく「完全参加」でもなく，「十全的参加」と呼ぶのである[28]。さらに，彼らの関心はその共同体内の参加の位置，「古参者」と「新参者」の交

替に着目し，周辺的な参加を通した「アイデンティティ」の発達を成員性の獲得，深化と捉えている。その関係・プロセス自体が学習なのである[29]。

それはレイヴとウェンガーが，実践を人，行為，世界を関係論的に見る社会的実践として見ており，参加を「常に世界の意味についての状況に埋め込まれた交渉，さらには再交渉に基づく」[30]過程と捉えていることによる。この見方に立てば，意味について交渉が行われている場としてロビーを把握することが可能である。ロビーで個々の活動を行いながらも，そこには相互作用があり，関心や問題の緩やかで暗黙裡に進展する共有化のプロセスも見出せるとすれば，社会的実践への参加と捉えることができるだろう。

しかし，彼らの議論では「実践共同体」への正統的周辺参加が前提となっている。彼らは，産婆，仕立屋，操舵手，肉屋，アルコホリック・アノニマス（AA）の5つの徒弟制の事例を検討した。これらは実践共同体への参加の条件が明確である。例えば，仕立屋の場合は，徒弟とその家族が親方に弟子入りの許可をもらうことであり，肉屋は職業内訓練を受けていることであり，AAは組織に加入し会員資格を得ている[31]。産婆，仕立屋，操舵手，肉屋はその世界で一人前の職業人になるということを目的とした集団である。AAは職業ではないが，断酒し続けられるようになることを目的として共有している集団である。また，アイデンティティは実践共同体のなかで知識や技能がしだいに習得される過程と表裏一体となって形成されると考えられていた。したがって，正統的周辺参加論はすでにある安定した共同体への参加が所与になってしまっていること[32]に対する批判もあるように，特定の知識や技能の習得が目的として共有されている共同体であることが前提とされている。

よって若者支援施設のロビーのような目的やメンバーが固定化していない緩やかに人が出入りする場は，実践共同体とは質がだいぶ異なる。ロビーはまずメンバーの確定ができない。利用頻度で見れば，毎日のように来る常連から，たまに利用しに来る人，一度来て利用証は作成したが，二度と来なかった人もいる。単に利用頻度をもとに「新参者」と「古参者」を分類することは難しい。また，アイデンティティの形成に関しても，施設の利用者としての知識や技能の獲得が目指されているわけではない。したがって，ロビーを実践共同体と捉えることは難しい。

したがって，周辺的な参加が認められているからと言って，ロビーへの参加に，レイヴとウェンガーの実践共同体への正統的周辺参加論をそのまま当てはめることはできない。しかし，先ほど確認したように社会的実践への参加，そこでの意味の交渉，成員性の深まりとアイデンティティの変容など実践共同体で見られる過程はロビーにおいても生じていると考えられる。したがって，実践共同体とは措定できないが，社会的実践であるロビーを分析する際にも彼らの視点が参考になる。また，ロビーは施設によって意図的につくられた空間であり，職員が意図的にロビーワークを展開している空間であり，職員側はロビーにおいて緩い集団を形成しようとしている。したがって，ここではロビーをひとまず緩やかな実践共同体と捉える。

正統的周辺参加論を援用して，ロビーにおける参加の学習過程を分析する際に重要となる意味交渉概念についても確認しておく。ウェンガーは，学習とはすべての種類の活動を追求するのに継続的に加わることであり，その活動を定義するのに，世界に関心を持ち，お互いに関係を調整していくことであるとしている[33]。その上で意味交渉は，我々が世界を経験し意味あるものとしてそれに関与するプロセスで，人々の世界への関与への第一の最も主要な

プロセスである[34]としている。意味交渉プロセスは日常生活，仕事生活の中で常に起きており，実践共同体における意味は共同体内の相互作用によって相互構成されるものとして捉えられている。ただし，特に気にかける場面や課題を含む活動に関わるときには，既存の意味に対して新たな意味を付与する必要があり，このような場合にはより強く意味交渉がなされる。

この相互構成的な性質を持つ意味の交渉プロセスにおいては，「参加」と「具象化」が二重の基盤になっている。「参加（participation）」とは行為とつながり両方を提示するプロセスであり，社会的実践の場としての実践共同体の参加を意味している。一方，「具象化（reification）」は，辞書の定義によれば「（抽象を）を実態のある存在として，あるいは具体的な物質的事象として扱うこと」とされているが，ウェンガーは「経験を『客観的実在性（thingness）』に固定化させる物象を生み出すことによって経験に形を与えるプロセス」[35]として用いている。具象化のプロセスでは形を与えられることによる理解が意味の交渉の焦点になるが，その形が意味を固定化させてしまう危険性もある[36]。

ロビーに引き付ければ，過ごし方が自由で，目的が共有されていない場は意味が固定されておらず，参加の度合いが高く，具象化の度合いが低いと捉えることができる。この視点を参考にし，本稿では意味の交渉過程に伴うアイデンティティ変容と成員性の深化という観点から事例検討を行い，探索的参加の過程を描く。さしあたりレイヴとウェンガーの分析の視点を参照し，ロビーを緩やかな実践共同体と捉えるが，その限界も指摘することが求められる。

3．課題設定および調査の概要

（1）考察課題

本稿では，若者支援施設のロビーにおいて見られる「参加者自身がその場の意味を交渉・探求し，参加の仕方を作り出していく学習過程」を探索的参加と定義する。札幌市の若者支援施設であるAセンターを対象とし，利用者Pさん（後述）のロビー利用における意味交渉過程を中心に事例検討を行う。ここでの課題は次の３点である。

第一に，ロビーにおける多様な利用形態により必至となる日常的な意味交渉過程に即して検討する。

第二に，日常的な利用形態の差異が対立として現れる場面に着目し，職員が意図する実践共同体の再構成過程における参加と非参加の軌跡を検討する。具体的には，職員が設定したロビーの利用者会議をとり上げ，その会議への多様な参加形態を描く。ロビーの利用者会議を利用者がコンフリクトを意識化する機会として捉えると，それは参加を通じた学習，すなわちアイデンティティの変容や成員性の獲得が起こる場面と仮定できる。したがって，その会議への関わり方を類型化し，会議への参加／非参加，そしてその後の行動や意識の変容を捉える。

第三に，以上の過程を踏まえた成員性の捉え方について，ロビー空間を構成する主体であるPさん本人の認識を確認する。

（2）Aセンターの概要

本稿では，筆者がパートスタッフとして関わっていた札幌市若者支援施設[37]であるAセンターを取り上げ2017年4月から11月に収集した観察記録やインタビュー調査結果により分析

を進める。

Aセンターには，主に〈活動室〉と〈受付〉と〈ロビー〉がある。活動室は予約制であり，外部のサークルや団体がダンスや演劇活動のために利用している。34歳以下の利用者が多いグループは一般団体より安い若者料金で利用できるため，大学生や社会人サークルなど若者が中心に活動しているが，一般団体の利用もあるため幅広い年齢層の人々が出入りしている。また，Aセンターの主催事業も活動室にて行われている。例えば音楽や運動のグループ活動や料理，おしゃべり，映画鑑賞などのワークショップやイベント，若者対象の勉強会や講座，自立支援のプログラムなどである。

〈受付〉は職員の事務室の一角にある。Aセンターを利用するときは，利用証を作成することになっているため，来館時には受付に利用証を出してからそれぞれの目的の場所に向かう。また，受付からは事務所の中が見えるようになっている。Aセンター内で主にロビーワークを行う職員は7名程度勤務しているが，今日はどの職員がいるのか，事務室の中でどのように過ごしているのかは利用者から常に目に入っている。常連メンバーの中には職員に話しかけ，受付に「溜まる」ような光景も見られる。同様に職員にとっても，ロビーの様子が事務室の中から常に見える状態になっている。ロビーワークを行う職員は，事務室から出て若者と関わることを意識しているが，事務室の中にいるときもロビーの様子やトラブルを把握することができる。また，利用証を作成するとき，受け渡しをするときに挨拶に加えて一言掛けることを意識している職員も多く，単に場所を貸す施設でないというメッセージを投げかけている。

そして〈ロビー〉は開館時間内には誰でも自由に過ごすことのできるスペースであり，利用者の多くは10代後半から20代前半である。ボードゲームやテレビゲームを借りることができたり，卓球台が置いてあったりするため，利用者同士や職員と一緒に盛り上がっている姿も見られる。また，放課後の勉強場所を求めて来る学生には壁に向かって椅子と机が置いてあり，勉強に集中しやすい個別スペースが人気であり，浪人生の姿も見られる。靴を脱いで過ごす畳スペースではクッションにもたれかかり，一人でスマートフォンで動画を見ている子，職員と少し真面目な進路の話や家族，人間関係の相談をしている若者もいる。ロビーに来る若者たちは，それぞれ思い思いに過ごしているが，少し騒がしいグループの様子が気になったり，ここの職員は悩みを聞いてくれる存在かもしれないと認識していったりする姿も見られる。寄付食材を使用した食事の提供はAセンターが近年力を入れている取り組みであり，スタッフと利用者が一緒に調理した食事が「ご自由にどうぞ」と並んでいることもある。

自立支援プログラムの利用者がプログラム終了後にロビーで職員やメンバー同士で過ごしていることもある。プログラムがない日にもロビーに来て過ごしていることもある。

なおロビーで過ごすことを目的に利用している若者は1日に30～ 50名程度だが，活動室の利用の待ち時間にロビーを利用している人たちも多く，1日に100名以上が出入りするような日もある。平日の昼間は若者の利用もあるが，一般団体の部屋利用が中心であり，学校が終わる時間帯になると，友達と帰り道に寄って時間を過ごす子たちや，勉強利用のために来館する子たちが増える。休日になると，小学生の利用が増え，テスト期間前は勉強利用の学生たちで賑わっている。

（3）調査の概要

Aセンターのロビーにおける探索的参加の過程を検討するにあたり，Aセンターのロビー利用者と職員にインタビュー調査を行った。概要は以下の通りである。

インタビュー調査対象者

○利用者

対象者	性別	年齢	主な利用目的	ロビーの利用頻度	利用期間
P	男性	19	勉強，交流	週３～４日	約１年２か月

○札幌市若者支援総合センターに勤務する職員5名（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会の主任指導員及び指導員）

対象者	性別	勤務継続年数	主な業務内容	備考
B	男性	11 年目	施設管理運営業務，自立支援事業（以前はロビーワーク）	若者支援事業は８年目 主任指導員
C	女性	13 年目	ロビーワーク，交流促進事業，自立支援プログラム対応	指導員
D	女性	20 年目	自立支援事業（以前はロビーワーク）	若者支援事業は４年目 主任指導員

・インタビュー調査期間：2017年10月～12月

・なお，予備調査としてロビー利用者20名にAセンターを利用するようになった経緯やロビーで印象に残っていることなどについて，日常会話の延長線上ではあるが聞き取りを行った。その内容もデータ分析の際の参考としている。また，インタビューに協力した利用者は継続的にロビーを利用しており，調査者含め職員との関わりを比較的好意的に受け止めている人たちである。

4. ロビー空間における日常的な意味交渉過程

（1）自由な場・寛容な場への戸惑い

まず，ロビー利用者にとってロビーとはどのような場なのか。予備調査を含めインタビューを行った利用者の多くに共通していたのが，この場が多目的に使えることや自由な場であるという認識であった。第一印象ではそれぞれが好きなように過ごしている空間を肯定的に捉える人も多いが，否定的に捉えた人もいた。

> **利用者P**：*最初来たときに…（中略）…ゲームしてたりとか，畳で寝っ転がりながらやってたりとか，一部卓球ギャーギャーやってるしみたいな。ここすごいなーみたいな(笑)*

ここなんでもやさんなのかなーみたいな(笑)いる人たちのガラも悪かったし。…（中略）…まあ最初はちょっと，ここ自習場所なのかな？みたいなのを思いました。最初。だからあんまり印象は良くなかったっていうか(笑)…（中略）…ここもう来ないだろうなぐらいに思ってたんですよ。

Pさんは放課後に自習できる場所を探しており，友人から誘われAセンターに来館した。しかし，PさんのAセンターのロビーの第一印象はあまり良いものではなかった。Pさんがそれまで経験してきた学校のような空間と比較して，寝転がっている人が少しだらしなく見えたり，卓球をしながら騒いでいる人をうるさいと思ったのであろう。そして公共空間でそのように過ごす同世代の人たちの姿が理解できないものとして映ってしまった。他者の振る舞い方や過ごし方の違い，価値観の違いを目にし，「なんでもあり」なロビーで，自分はどのように振る舞えば良いのか戸惑いを感じていた。管理的な場，強制力のある場に慣れている若者たちは，ロビーのような自由で寛容な場をどのように解釈して良いのか迷うことになる。ロビーは基本的には私的ニーズを満たすために利用されているが，スタッフや他者の振る舞いに着目しながら，主体的に自分の振る舞い方を捉え直さざるを得ないような機会が埋め込まれているといえる。ロビーの意味を巡って，暗黙の交渉がなされると言ってよい。

PさんはAセンターのロビーの様子に戸惑い，「もう来ない」と思っていた。しかし，受験生であったPさんにとって放課後に勉強できる貴重な場所ではあったため，利用を続けていた。利用をし始めて最初の４カ月は一緒に来た友人以外との関わりは持っておらず，勉強場所も隣の机と仕切りがある個別スペースを選んで利用していた。しかし，ある友人がロビーの中央にある机で勉強をし始めたことによって，Pさんも勉強する場所を変えるようになり，職員から話しかけられることが増える。その後，自習利用者対象の交流イベントに参加して他の利用者との関わりを持つようになる。Pさんは受験のためやらなければならない勉強とセンターで促される利用者や職員との交流を両立できる場として解釈していくことになる。すなわち，「勉強場所」に加えて「交流もできる場所」という意味を付与していった。このように，ロビーで許容される振る舞いや過ごし方を受け入れる際には葛藤が生じる。Pさんは「勉強場所」としての機能を優先し，利用を続けたが，このような価値観の異なる他者の存在を許容できず，再び利用することがない利用者も少なくないと思われる。

（2）職員による「余白」を残す場づくり

ではこのような自由で寛容な場は職員のどのような意図でつくられているのか。Aセンターには，条例に基づいて中学生以下は19時，高校生は21時までに退館しなければならない，喫煙及び飲酒行為の禁止などといった決まりはあるが，それ以外の明確な決まりはない。例えば，パソコンやゲーム，卓球の道具は受付で名簿に名前と使用時間を記入して使うというルールはあり，目安の利用時間も決めてはいるが，次に使う人がいないときはそのまま使っていても良い。それは場のあり方を職員が全て決めてしまうのではなく，利用者にある程度委ねるという意識があるためである。

職員D：*基本的なルールはルールとしてあると思うけど，…（中略）…自分たちの場所を自分たちでつくっていくってところを残しておくというか，もちろん自分たちが使い*

やすいように使う，それを考える場所みたいなところでもあるんだろうから。一般的な，ほんとに公共施設のように，「一，なになに」「一，なになに」みたいな感じの施設とはまたちょっとね，きっと違うんだろうなとか思うね。…（中略）…利用できるものは利用して構わないけども，そこに不都合が起きるんだったら，その不都合を整理するために話し合おうかっていうようなことなんだろうなとは思うね。

利用者は緩いルールのロビーだからこそ，自分たちに都合の良いように場を解釈し，どのように振る舞うのかを考えていくことになる。このように利用者が「自分たちの場所を自分たちでつくって」いけるような余白を残しておくという職員の意図が読み取れる。したがって多様な目的やニーズを持つ人が集まるほど，場の解釈の仕方が異なり，時にはそれがぶつかるようなこともある。職員は，利用者同士のニーズがぶつかり合う時には可能であれば本人たちで解決していくことを期待している。

職員C：*自由なフリースペースだからこそ，作るルールは若者自身でやっぱり考えてほしいなっていう部分もあるので，それが実際ね，ルールにまで至らなくっても，（卓球台を）今使っている子が次使いたいとかっていうのは，そこに大人ありきではなくて，利用する若者自身が考えて行動してほしいなっていうのがあるので，一旦は入りますけど，できる限り自分たちでも言うんだよーっていうのはよく伝えてはいましたね。*

Cさんは自由な場だからこそ，若者自身が考えて行動してほしいと話していた。例えば学校では，服装や授業態度，休み時間の禁止事項など，ルールとして決められているものが多い。特に高校生ぐらいの若者にとって，自分がこの場で何をしても良いのか，何がしたいのか，何をするべきか，そのように考えるような機会はあまりないだろう。職員はニーズのぶつかり合う若者同士が話し合える関係であるかどうか，自分で要望を言うことが何かしら本人の成長につながるかどうかを判断したうえで，ニーズの調整の場を意図的に設定するような場合もある。

ルールをあえて緩くすることで，施設でできる活動の幅も広がり，ロビーはより多様なニーズを抱えた人たちがつながりやすい場になる。学校とは異なり，その場での過ごし方が決められていないからこそ居心地の良さを感じる若者も多い。

このような場づくりには「自分たちの場所を自分たちでつくっていく」自治活動の支援という特徴を見出せる。先行研究で確認したように，若者対象の施設において，利用者会議や委員会を設けて利用者が施設運営に関わるような事例も多く紹介されており，このような場づくり自体はAセンターに特有のものではない。前節と関わりここで確認したいのは，会議やアンケートというかたちでの施設づくりへの参加だけではなく，日常的なロビー利用を通して，戸惑いを覚えることで「この場のあり方や自身の振る舞い方を考えないといけない」という気づきにつながっている場合もあるということである。

また職員側があえてルールを緩くして，自由な場づくりを意図し，その場の解釈の仕方，利用の仕方を利用者に可能な限り委ねているとしても，職員の介入は不可欠である。次のBさんの指摘はその介入を示唆している。

職員B：*個人的な意見だと，便利にしすぎないっていうところがね，すごく自分の中には残って。*

Bさんは，ロビーを自由に開放しつつも，「便利にしすぎない」という意図を持っていた。過去に行った料理のプログラムであまり関係性ができていない若者たちが一緒に作業をするようなときに，例えば使いたい鍋がコンロの下にあり，作業している人に一言かけなければいけないという「不便な」環境の中で，若者同士が声を掛け合うような場面が見られたという。Bさんはこのような経験から，「便利にしすぎない」場づくりをセンターのロビーにおいても意識していた。

職員B：*ここを仮に自習生がもっと使いやすく，自習生のためにいくらでもお金が使えるってなったら，個人の自習スペースをめっちゃ充実させて，パーテーションでぶわーって並べたら，使いやすくなるのかもしれないけど，そこに人と人との関わりだとか，「ちょっと後ろごめんなさい」の一言だとか，そういう大事なものを失っちゃうだろうなーとは思っているから*

利用者から出てくる要望に対しても，このようにある一定の目的の人だけが使いやすいロビーではなく，様々な目的の人が居ることができるようにあえてトラブルが起こりやすい場をつくるという意識もある。

（3）小括

ロビーは職員が意図的に「余白」をつくり，多様な参加・利用形態を産み出すとともに，他者のふるまいや職員のふるまいを参照しつつ，ロビー空間の意味を探求し，自分なりの参加形態を産み出すことができる場である。つまり，ロビーにおける参加の度合いを高め，ルールを作成したり，トラブルの際にも一方的な注意や介入をしたりしないようにして，具象化の進行過程を抑止していると見ることができる。参加者の中には多目的で自由なロビーに戸惑いを持つ人もおり，ロビーは学校のような制度として明示されたルールに従う場ではないことを了解していく過程自体がロビーの参加を通した学習の一つであると言える。

しかし，このような特徴を有するが故に，その場では不断にコンフリクトが発生し，利用調整が行われることになる。コンフリクトの調整過程は，差異に直面しながらも退出や排除をせずに，問題に関わり続けることを意味し，場の意味や自分がその場にいる意味を振り返る過程でもある。ここに緩やかな実践共同体へ参加しつづけることによる学びを見出すことができる。

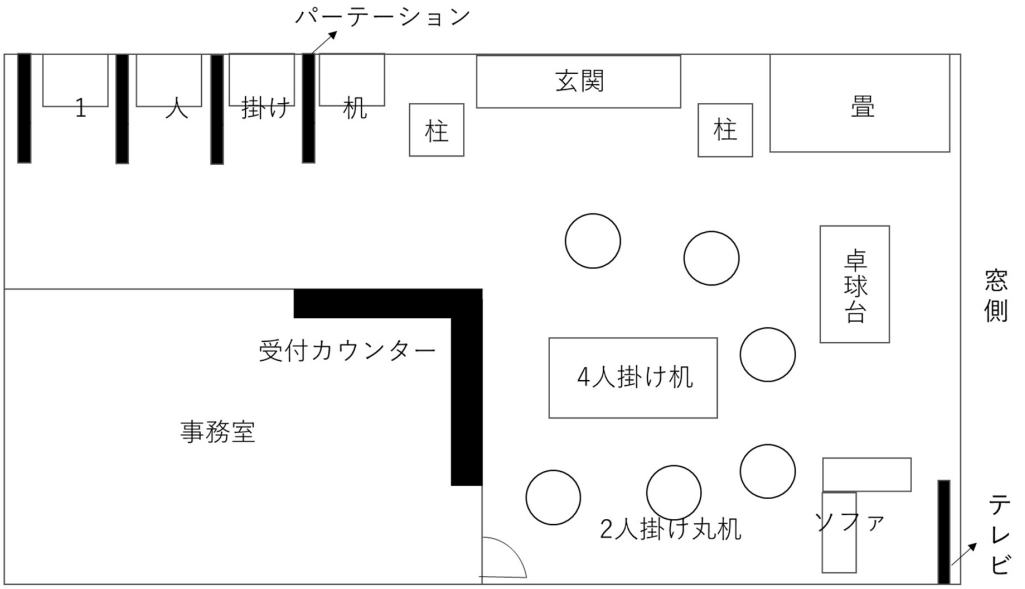
自分なりの参加の仕方を交渉・探求する過程を，本論文では探索的参加と呼ぶが，それはこのような省察の過程を含んでいる。そして自由な参加の場であるが故に，コンフリクトが顕在化することは必然的である。利用者間の差異が対立として顕在化した場面は，場の再定義が求められる場面であり，参加の仕方に関する探索が深化する局面である。そこで，次にこの場面に焦点を絞って，探索的参加における学習の展開を確認する。

5．ユーザー会議における探索的参加の過程及び成員性の深化

（1）ユーザー会議の開催について

Aセンターにおいて，2017年4月から9月にかけて卓球台と畳スペースのあり方をめぐる対立が起こった。以下では，ユーザー会議を設定した職員たちへの聞き取りの内容およびユーザー会議の議事録をもとに経緯を記す。

①卓球の利用に対する不満



4月の時点のロビーの配置は上図の通りであった。卓球はラケットと球が近くの棚に置かれていて，特に受付をしなくても自由に行うことができるようになっており，ロビーという場の多様性を表すものとして認識されていた。体育室がないAセンターは卓球が体を動かすことのできる数少ないツールであったため，利用者に人気が高かった。また，職員も卓球を通して利用者との関係性を築き，深めるために欠かせないものとして認識していた。卓球が得意な職員がいたということもあり，卓球をするためにロビーに来ていた利用者も少なくなかった。しかし，勝負が白熱してくると球がまわりに飛んでいってしまうため，まわりの利用者から「球が当たって痛い」，「拾っても謝らない」など，卓球利用者に対する不満の声が職員に上げられるようになった。プレイヤーの後ろが畳スペースとテレビのスペースとなっているため，特に畳でゲームや友達とおしゃべりをして過ごしている利用者や，テレビの前でソファに座ってWiiなどのゲームをしている利用者の中には，その場を「定位置」としていた者も少なくなく，そのような不満の声が継続的に上がっていた。

職員の側では，利用者の意見を取り入れ，利用者を施設運営に関わらせていくという構想が前々からあり，新しい年度も始まったため，昨年度より出ていた卓球のマナーや畳スペースのあり方を利用者も巻き込んで考える場を設定することとなった。4月末に「ユーザー会

議」としてロビー利用者を中心にロビーのあり方について意見を求める会議が開催された。開催日は卓球をよく使っていた利用者や卓球利用のマナーの悪さをこぼしていたメンバーに参加できる日にちを聞いて決定した。

卓球利用者のマナーの悪さを職員に訴えた利用者たちは，継続的にロビーを利用していた。Wiiはテレビの前でしかできないので，Wiiをやりたいのであれば卓球利用者とのトラブルは避けられない。一方，畳を定位置にしているグループになぜそこに溜まるのか聞くと，本人たちは「コンセントが近いから」という理由を答えた。スマートフォンを充電しながら，靴を脱いで，時には寝転がりながら過ごすことができる。ロビーに靴を脱ぐことができるスペースは畳スペースのみであり，ちょうど職員のいる事務室からも柱の陰に隠れ，死角になっている。ロビーの中では最もプライベートな空間をつくりやすい場所だったと考えられる。しかし，そのスペースにいつも同じメンバーがいることで閉鎖的な雰囲気になりがちであった。「ユーザー会議」を提案した職員には，一方的に卓球利用者に対する要望を伝えるだけでなく，畳スペース利用者に自分たちの過ごし方を振り返ってほしいという意図もあった。また，今回不満の声を上げた利用者は普段から職員ともよく会話をしており，日常の雑談の中で卓球利用に対する不満を職員が掬い上げたという面もある。

②ユーザー会議の開催

4月末の第1回ユーザー会議の参加者は10代男性4名・女性6名，20代男性2名（性別は利用証登録より）であった。その中には途中退席した者や職員から参加を促されて部分的に意見を言った者や，会議の場には出ず，終了後紙に意見を書いて提出するといった者もいた。職員は日程を決めてから開催当日まで参加者を募ったが，会議への参加を断った者も多かった。しかし，彼らは「いやーちょっと忙しいので」，「勉強してるので行けたら行きます」と何らかの理由をつけて返答をしていた。このことは「ユーザー」として呼びかけられた利用者が，参加を断った者も含めて何等かの参加や意見表明の義務を感じていたことを示している。結果的に実際の会議には半年以上は継続的にロビーを利用している「常連」メンバーが集まった。利用期間が長い者ほど，問題を自分ごととして受け止めていることの反映であろう。

当日のユーザー会議は以下のように進められた。最初に職員が「普段ロビーを利用していて，卓球や畳スペースのあり方について他に気になることはあるか」と他にも議題はないか投げかけたが，特に出なかったため，「卓球台・畳スペースの利用について」をテーマに1時間ほど話し合いを行った。会議の雰囲気や様子としては，基本的に卓球をよく利用していた若者の発言が中心であった。そのため意見を出し合ったり，議論し合うというような雰囲気にはならず，発言をためらったり，その場にいるが「どうでもいい」というような無関心を体現する参加者も多かった。中には「卓球をすることでコミュニケーションができる」など個人的な要望や不満だけでなく，ロビーに卓球があることの意義を指摘したような発言もあったが，議論にまでは至らなかった。以前から卓球の球が当たるという不満を口にしていた利用者もこの場ではなかなか意見を出せるような雰囲気ではなかったが，「球が当たったときに謝ってくれれば別に気にならないから」という言葉が卓球利用者の攻撃的な姿勢や発言を和らげるきっかけにもなった。

混雑時の卓球の使用を控えることも含めて，卓球のルールを運用してみるという流れになったが，細かなルール決めに関しては卓球利用者の発言権が強く，それ以外の参加者は

「ルールなんてどうでもよい」という態度であった。したがって，会議内でのルールの作成は，卓球利用者と職員を中心に進められた。

この会議での決定事項は以下の通りであった。

卓球の使用ルール	畳スペースのあり方
・卓球の道具は事務室で預かり，利用の際は名簿に記入して使用する ・使用時間は 30 分，混雑時は 15 分に ・利用時にはパーテーションを必ず出して使用する（二枚だと不十分との声があがった） ・夜間入れ替え時など，ロビー混雑時は使用しない ・センターの道具は丁寧に使う ・マナーを守る（わざとじゃなくても当てたら謝る，など）	・卓球台側の２畳分を減らす ・座る際には広がり過ぎない ・コンセントの場所に溜まり過ぎない

5月から以上のルールを導入し，6月に再度話し合いの場を設定し，その効果を検討することとなった。

この会議を開催した職員は，論点の提示が曖昧であったこと，スタッフのファシリテーションも不十分であり，参加者全員の意見を拾い上げることができなかったことを反省点として挙げていた。次回開催に向けては，個人の要望を出し合ったり，自分の意見を通すための場ではなく，「あくまで“ロビーの快適な利用”を目指す」，「利用する“皆”のための会議であることを徹底」するという内容が共有されていた。

③第2回ユーザー会議での振り返り

その後6月に行われた第2回ユーザー会議では卓球のルール変更の効果の振り返りがなされた。第2回ユーザー会議の参加者は10代の男性5名・女性6名，20代の男性1名（性別は利用証登録より）であり，前回も参加した者は約半数いた。

職員が参加者から意見を求めたところ，卓球のルールについては，前回の会議で卓球のルールを作ってから卓球利用者が減り，トラブルは少なくなったが，その中でもマナーを守らない人はいるという声が上がった。「卓球台自体壊れかけているため，撤去してもよいのではないか」「卓球台を使っていない時間帯のスペースがもったいない」というような意見も出た。しかし，「卓球が気軽にできるというのもセンターの特徴の一つであった」と指摘する者もいた。解決策としては卓球台に代わるテーブルピンポンのようなもので代用したり，卓球台は常設ではなく卓球の日を設けて活動室を開放する案などが出された。

職員は前回の反省から，利用者へのアンケート結果（ロビー利用目的・居心地の良さ・ロビーで気になることなどを聞いたもの）を公開し，その内容をもとに話し合いの場を設けた。そのため，お互いの主張を否定的しあうような議論になるのではなく，意見を出し合う場として会議が進んだ。ただし，会議の場にいても，「こんな話し合いしてもしょうがない」という雰囲気の者や，「どうでも良い」と述べる者も少なくなかった。さらに，今回は前回参加し

た卓球利用者は参加しなかった。また，自習利用者も会議への参加を断る者が多く，参加者の利用目的には偏りがあった。

第1回ユーザー会議におけるルール適用とその効果については，会議で出た意見に加え，日常的な関わりの中で，卓球台やロビーのあり方に対する意見を把握するということも意識されていく。それが以下のユーザー会議に見られる多様な参加形態とそれに対する職員の対応に表れている。

（2）ユーザー会議への多様な参加形態

先に述べたようにユーザー会議はコンフリクトを意識化していく機会であり，参加を通じた学習，すなわちアイデンティティの変容や成員性の獲得の変容が最も起こる場面であると仮定できる。ここではロビー利用者のユーザー会議への関わり方を5つに分類し，類型ごとにその後の行動や意識の変容を捉える。

①会議への参加を「断る」

会議への参加を断った者は職員に対して「いやーちょっと忙しいので」,「勉強してるので行けたら行きます」などの返答をしていた。意見表明の義務を共有しながらも，勉強など私的なニーズを満たすことができている利用者が会議の目的を共有していないのも自然なことである。また，参加を断りながらも，その場で勉強を続けるというロビーでの居方ができるという事が分かる。また，職員もそのような居方を認めている。単に自習場所，待ち合わせ場所として利用している「新参者」は自分たちでこの場のあり方を決めるという意識が醸成されておらず，会議への参加に全く意欲を示さない人は多い。

②会議をいったん断った⇒終了後に意見を紙に書いて職員に見せる

「勉強がしたいから」という理由で会議への参加を断ったPさんは会議終了後に卓球台の在り方について，自分の意見を書いて職員のところに持ってきた。参加を断りながらも，ロビーという場で間接的に会議に参加していたことで，この場のあり方を考えざるを得なくなってしまったのである。この行為に関するＰさんの意識については後述する。

③会議への参加⇒その後の行動に変化が見られた

2回目のユーザー会議に向けて，職員は前回の会議においてあまり発言できなかった人や参加しなかった人からも日常的な会話の中でニーズをくみ取ろうと意識的に働きかけていた。

数日後，前回の会議に出席はしていたが，ほとんど発言がなかった利用者Ｑが，他館の卓球台とゲーム利用がどのようになっているのかを見てきたと話すことがあった。

利用者の名前　Q
＜利用者の様子＞
窓口に来てスタッフに話しかけてきた。
・ゴールデンウィークのときに他の館の様子をみてきた。卓球台などは出しっぱなしにしてるセンターもあったが，ゲーム機が出しっぱなしで自由にゲームできるのはBセンターとAセンターだけなのでそこはいいところだと思った。

・自分があまり来ていないので分からないが，卓球が今の形になって人が少なくなったのではと思っている。

＜職員の振り返り＞
卓球がどれくらい利用されているのかということや，畳がいつ復活したのか，復活してからどれくらい使われているのか，などロビーの使い方についていくつか質問を受ける。「卓球のシステムが変わってから静かになって，嬉しいような寂しいような･･･」と言っていた。

（職員への聞き取り内容より）

利用者Qは卓球利用にルールが導入されて利用者が減っているように感じると話しており，数日後「卓球がどれぐらい利用されているのか」「畳はいつ復活したのか」「復活してからどれぐらい使われているのか」など職員に質問していた。「卓球のシステムが変わってから静かになって，嬉しいような寂しいような…」という言葉からは，ユーザー会議の結果できたルールへの評価を迷う様子が伺える。

④会議には参加しない/誘われていない⇒その場のあり方を考えるようになる

ある職員が畳の拭き掃除をしていると，ある利用者が「手伝うよ」と声をかけてくれ，彼らのグループの他のメンバーも手伝ってくれるということがあった。彼らは畳スペースで過ごしていることが多く，自分たちが使っている場所を自分たちで掃除する姿が見られたのである。そのときに「畳を新しくすれば？」「スリッパも買い換えて欲しい」というような要望が出ていた。またその後別のグループや自習利用の高校生たちが手伝ってくれた。自習利用者たちからは「畳スペースは無くてもいいと思う」「寝ている人はだらしなく見える」「TV台はここに設置しては」という意見が出た。この出来事から職員たちの間では，普段畳を使っている高校生たち以外の自習利用や貸室利用の人たちにも畳スペースについてどのように考えているのか聞いてみるべきだという意見が出たため，第2回ユーザー会議で使用されたアンケートを取ることになった。

この頃小中学生の利用が増えてきたということもあり，小中学生が卓球を頻繁に利用するようになる。ある利用者は彼らが卓球の球を拾ったときにお礼を言わないこと，畳スペースに土足で入ってくることに腹を立てていた。その話を聞いた職員は，お礼を言うことや「土足で上がってはいけない」ことを優しく教えてあげて欲しいと促すと，「機会があったらやる」と笑って応答し，次回のユーザー会議には「出れたら出る」と話していた。

一方，別の利用者Rは卓球のルールが導入されてからは，マナーを守る人が多く，以前のようなトラブルは無くなったように思うという声もあった。

利用者の名前　R
＜利用者の様子＞
職員と話していた際，ある利用者さんから「卓球利用している人たちがまわりの人のことを考えてくれない」と申し出があったことをきっかけに，ロビーの使用マナーについての話に展開した。

卓球利用の高校生は礼儀も正しく，改めて指摘するほど荒い使い方をしていなかったこともあり「あれでダメならXたちはできなくなる」「ゲームしている側も，ソファを前に出したりと工夫できる」と使い方に意見をしていた。

また，「卓球の使い方が変わっていい部分もある」と，台帳記入をして卓球をする人は，マナーをきちんと守る人が多く，前までのような卓球のトラブルが無くなったことを挙げていた。

＜職員の振り返り＞

Rは自分達についても「あの高校生が怒られるなら，俺らの方が感じが悪いよね」とロビーや畳での利用雰囲気を評価するなど，客観的に物事を見れているように思えた。

（職員への聞き取り内容より）

利用者Rの来館時にある利用者から「卓球利用している人たちがまわりの人のことを考えてくれない」と申し出があったのだが，彼らは礼儀も正しく，改めて指摘するほど荒い使い方をしていなかった。その様子を見ていた利用者Rは対応した職員とロビーの利用に話が及んだという。ユーザー会議では卓球利用のルールが議論されたが「ゲームしている側も，ソファを前に出したりと工夫できる」とまわりの利用者の使い方にも意見をしていた。また，職員の振り返りにもあるように「あの高校生が怒られるなら，俺らの方が感じが悪いよね」とロビーや畳での利用雰囲気を評価するなど，利用者Rが客観的に物事を見られているように思ったという。

このように，ユーザー会議と職員の働きかけを通して，単に個人的な快／不快ではなく，公共の場としてのロビーのあり方を考え出す利用者が増えていった。

⑤会議での積極的発言⇒来なくなる

今までは自由に使えていたのに，わざわざ受付で卓球の利用台帳に名前と時間を記入し，備品を借りるという行為が面倒なのか，ルールができて様子を伺っていたのか，ルール試行時は卓球利用者が減ったようだった。また，以前の卓球利用グループがAセンターではあまり卓球をやらなくなった。会議に参加した卓球利用者があまり来館しなくなったのは，会議での雰囲気に不満を感じたのか，ルールが導入されたことが気に入らなかったのか，この場で本気で卓球をやるべきではないと思ったのかは確認ができていない。しかし，彼らとAセンターのつながりが完全に切れたわけではなかった。卓球をやるときは他のセンターを利用するようになったり，卓球をやらなくても数か月に1回はＡセンターに顔を出す者もいた。

このようにユーザー会議というロビーという場あり方に対する意見を表明し，ルールを作成していくという，普段のロビーと比較すると非日常的な経験をそれぞれがしていった。そして，会議という場に参加したかどうか，そこで意見が言えたかどうかということよりも，その後の日常的なやり取りの中で，行為や考え方を変容させていくことが示唆された。ユーザー会議においては，卓球の利用や畳スペースでの過ごし方に対するルールができた。このルールは，ロビーという自由で多目的な場の意味をいったん固定化したものと言える。このルールはロビーの参加者の様々な意見を取り入れて作成したものとは言いがたい。しかし，

参加の度合いが高く，場の目的を共有できない中で，ユーザー会議は明示的な意味の交渉の機会を職員側があえて設定した場面であった。また，具象化の度合いを低くし，参加の度合いを高めるという点に関わっては，第２回ユーザー会議において「卓球台を常設にしない」という意見が出ていたが，職員側はその意見を採用せず，ロビーの配置換えをすることで卓球台の常設を継続させた。職員による具象化の進行の抑止と参加の自由度を高める働きかけがここでも確認できる。

このように参加者がユーザー会議という非日常的な活動に自分なりに関わっていく/関わらない過程で，その場の意味づけを深めるプロセスとして探索的参加を捉えることができた。そしてその参加における意味の交渉の余地を保っている職員の関わりも確認された。

（３）成員性の深化

2章で確認したように，探索的参加はロビーという緩やかな実践共同体への成員性およびアイデンティティが深化する過程でもある。ここではユーザー会議への参加形態②をとった利用者Pさんのインタビューより彼が場をどのように捉えていたのか検討する。

利用者Ｐさんはユーザー会議に参加はしなかったが，終了後自分の意見を紙に書いて持ってきた。会議に参加しなかった理由について，Pさんは以下のように話していた。

> **利用者P**：*自分の目的に卓球が邪魔だったら，要らないって当然言うじゃないですか。邪魔だなって思った人は当然。けど僕とか，多分勉強してる人たちみんな多分，卓球台はどうでもいいと思ってると思うんですよきっと。だからそういう人たちはもう別にどっちでも良いだとか，あってもなくてもどっちでも良いよみたいな感じなのかなとは。*

Pさんは勉強の息抜きとしてよく卓球を利用していたが，主目的はあくまで勉強であるため，卓球のあり方についての会議にあまり興味を示さなかったという。しかし，勉強中会議の話し合いの様子が聞こえてきて，卓球利用者の発言が気になってしまう。職員の後押しもあり，「卓球をうるさいと思うのであれば，自習を他の場所でやれというのはおかしい」，「ここは卓球場じゃないから，本気で卓球がやりたいのであれば体育館に行ってやるべき」という意見を紙に書いて職員に伝えた。Ｐさんはロビーでの卓球台の設置目的について，次のように話していた。

> **利用者P**：*卓球台の設置目的はあれですよね，コミュニティの築くきっかけとして使ってくださいよぐらいのノリじゃないですか。*

施設で関係性を築くツールとして認識していたＰさんは，卓球を本気でやりたいという意見を通そうとする利用者に対して怒りを抱き，意見を書いた。しかし，Pさんは会議の雰囲気もあり，会議の場で意見を言うことはなかった。

では，Pさんはこの施設の意義をどのように捉えているのか。インタビューで彼は「若者支援」施設に対して，学校や一般的なイメージの社会には馴染めなかった人たちの，今まで自分が経験してきた場所とは全く異なる場所という想像をしていたと話していた。

利用者P：*若者支援センターっていう名前じゃないですか。施設名。若者支援とか聞いたらなんか…（中略）… 社会になんか，上手く馴染めなかった人とかの，社会復帰の支援だとか，まあ実際そういう施設なんですよね？きっとここ。…（中略）…自分とはすごい馴染めない人たちがたくさん集まってたりだとか，っていうイメージをすごい持っちゃったっていう。実際に最初ネットで見たときは。だから，結構一般の人からしたら，同じようなことを思う人々からしたら結構，行こうとは思わない。*

Pさんは先述のようにロビーの第一印象もあまり良くはなかった。自分が過ごしている学校のような空間 とは対極のものとして，特別な支援が必要な人たちの場所と捉えていたことが読み取れる。しかし，今は「勉強＋交流」もできる場としての魅力を感じており，その認識の変化を肯定的に捉えている。

利用者P：*まあ実際，いざ来たら来たであんまり気にならないですし。逆に色んな人がいるなっていうのを知れるいいところだと。…（中略）…なんか結構僕はいいことだと思うんです。まだ今は…（中略）…全然社会に出てないですけど，…（中略）…なんか学校にあんまり，自分とは，今まで関わってこなかったような人々がいるのを，社会に出てから知るよりは，全然今学生のときから知っといて社会に出た方が，全然対応が違うっていうか，いやー，なんて言うんですかね。順応の仕方みたいな*

Pさんはセンターを「色んな人がいるということを知れる」場所だと捉えており，学力的に分けられている学校では出会わなかったような人たちと同じ空間の中で過ごすという経験によって，自分の中での他者に対する価値観の広がりを感じている。また，ロビーを学校と社会の中間的な場として認識していることが読み取れる。

予備調査でインタビューを行った利用者の中には，「若者支援施設」という名前に対して「すごい悩んでる人がいそう」というイメージがあると話していた。しかしロビーで過ごしていると，不登校だという話や同い年だけれども働いているという話，家庭環境が複雑だという話が耳に入って来たり，ロビーで知り合った利用者の会話の中で出てくることがあり，学校では出会わない同年代の子たちを認識していくような出来事があったという。親密な関係にならずとも，このような他者に対する見方の転換，社会に対する価値観の広がりはロビーの中で日常的に起こっているのだろう。

ただここで興味深いのは，Pさんの発言に戻れば，この施設の中心となる利用者は自分ではないという認識が強くあるということである。周辺的な参加者という意識である。

職員は自立に課題を抱えた若者に対する関わりが中心だと把握しているわけではない。ユーザー会議への関わりを見れば，Pさんは自分なりにこの場のあり方を考え，会議という場で共有せずとも，それを職員に伝えるというかたちでその後のロビーのあり方に影響を及ぼした一人であり，十全的な参加者として捉えられる。

おわりに

本論文では若者支援施設のロビーに居る，来る若者たちがロビーという場のあり方を自分たち自身で考え，作りだしていく探索的参加を通した学習を検討することを目的とした。Pさんの意味の交渉過程に則すと，第一にロビーという意味が規定されない自由で寛容な場において，ロビーは明示されたルールに従う場ではないという気づきを埋め込んだ場であることが確認された。Pさんはロビーでの他者の振る舞い方に戸惑いながらも，「勉強＋交流」といった意味を付与し，関係性を広げていくことができる場として認識していった。また，そのような場が形成されている背景には，職員側の「自分たちの場を自分たちで作っていく」こと（自治）や「やりたいという思いをかたちにする」といった活動への参与を促す意図があることも確認された。その意図は曖昧なルール，空間配置，掲示物などにも現れる。具象への多様なアクセスや意味交渉の機会を担保することが職員側の意図としてあることも確認された。ロビーワークに重要性を見出している施設の中心的な価値はここにあると考える。

第二に，Pさんのユーザー会議への「非参加」という関わりから，その人にとって意見せざるを得ないこと，無視できないことを言える，表明できる場や関係性が日常にあるかどうかが重要になってくることが示唆された。ユーザー会議では，会議の場に参加した／しなかった，会議の場で意見した／しなかったということは，形式的な事象にすぎず，その後の日常的な関わりの中で意見を表明する人が多かった。Pさんに限らず，できたルールのあり方や評価を日常的に問い直す姿も見られた。緩やかな実践コミュニティのコンフリクトへの対応・解決に多様な関わりを可能にすることで，普段は日常的に行っている暗黙の調整が，ユーザー会議への関わりを通して，言語化されたり，他者の振る舞い方を評価したり，自分自身の過ごし方を省察する過程が見られた。

第三に，Pさんはそのような若者の自治ややりたいことの実現という価値を埋め込んだロビーという場を通して，自分とは異なる背景を持つ他者や「若者支援」が必要な社会との接点を実感していた。自身はこの施設の周辺的な参加者であるという意識がありながらも，新たなつながり，見方の転換の機会が埋め込まれているとも言える。

以上より，ロビーで行われていた探索的参加とはどのような学習なのか。その場への参加のあり方を自分自身で考え作り出していく探索的参加は，参加者が参加度合いを自分で決めることができ，周辺的な参加にとどまっていてもその場から排除されることはない。参加の目的が意思決定ではなく，時間と空間を共有しながら，日常的実践との関わりでその場のあり方が共に模索されていく。これがロビーおける学習の特徴と言えるであろう。

場への関わり方を自分自身で考え，作りだしていく過程は，自由で寛容な場への戸惑い・葛藤がきっかけになっており，職員や他の利用者との関わりの中でそれを表明したり，調整することが新たな意味の獲得につながっている。Pさんが場の意味づけを深めた機会がユーザー会議であったとすれば，「非参加」という選択をしながらも，自分の意見を表明するという行為が成員性を深めたと言える。しかし，Pさんが職員に意見を伝えたのは，純粋にロビーという場のあり方について意見したいというよりも，ある利用者の意見が気に障ったことが動機としては大きい。そのような経緯として見ると，今後の課題として，Pさんの価値観を施設の外の関係性やコミュニティとの関連で，Pさんの場の意味付けの変化を捉える必要が

ある。

また，本論文では職員側の場への意味づけや意図については詳細に検討ができなかった。会議ではなく，日常のやりとりも含めた学習過程が確認されたのは，職員が日常的に意図的な働きかけを行っており，意識的に聞き取った面もある。その点を踏まえた上での実践分析も必要になる。また，今回はロビーに焦点化したが，施設全体としての実践コミュニティのあり方，すなわちサークル活動や主体的に地域に関わる活動なども含めた若者支援実践がつくる実践コミュニティの構造を捉えた上で，ロビーにおける学習の特質を明らかにすることは今後の課題としたい。

---

[1] 田中治彦「『子ども・若者と社会教育』の課題」日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育：自己形成の場と関係性の変容』東洋館出版社，2002年，p.14。

[2] 伊藤学「若者を支援する職員の課題と役割：東京都青少年センターのロビーワークの記録」久田邦明編著『子どもと若者の居場所』萌文社，2000年，pp.99-101。

[3] 伊藤，前掲，p.103。

[4] ロビーは公民館の施設デザイン研究の中でもその価値が確認されてきた。浅野はロビーは施設の顔となり，その様相が公民館のあり様を物語ると述べている。（社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店，2012年。「公民館ロビー」の項目より）

[5] ロジャー・ハート著／木下勇・田中治彦・南博文監修，IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）日本支部訳『子どもの参画：コミュニティづくりと身近な環境ケアの参画のための理論と実際』萌文社，2000年。

[6] 久田邦明「若い世代のための社会教育の課題」『月刊社会教育』国土社，1996年3月，pp.18-19。

[7] 青山鉄平「青少年教育研究におけるユースワーク論の位置」文教大学人間科学部『人間科学研究』第39号，2017年。新谷周平「参加・参画論の展開と理論的課題：子ども・若者・大人の関係性から」子どもの参画情報センター編『子ども・若者の参画：R.ハートの問題提起に応えて』萌文社，2002年。

[8] 新谷，前掲，p.34。

[9] 同上，pp.34-35。

[10] 新谷周平「若者の参画の機能：〈ゆう杉並〉中・高校生運営委員会を対象として」日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育：自己形成の場と関係性の変容』東洋館出版社，2002年。

[11] 福田雅章「あらためて子どもの権利の本質を問う：〈川崎市子どもの権利条例は，子どもの権利の本質を踏まえているか〉」『教育』第668号，2001年。

[12] 新谷，前掲註7，pp.37-38。

[13] 新谷周平「『居場所』型施設における若者の関わり方：公的中高生施設『ゆう杉並』のエスノグラフィー」『生涯学習・社会教育学研究』第26号，2001年，p.28。

[14] 七澤淳子「青少年センターでの居場所づくり」田中治彦・萩原健次郎編著『若者の居場所と参加：ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社，2012年，pp.111-112。

[15] 同上，p.112。

[16] 調査報告『若者の成長におけるユースワークの価値：京都市青少年活動センター利用者インタビューから』公益財団法人京都市ユースサービス協会，2017年12月。

[17] 原未来「ユースワークと出会い，どのように離れていくのか」同上，p.48。

[18] 同上。

[19] 同上，p.106。

[20] 同上。

[21] 阿比留久美「『居場所』の批判的検討」田中治彦・萩原健次郎編著『若者の居場所と参加：ユースワー

クが築く新たな社会』東洋館出版社，2012年，p.46。

[22] 同上，p.46。

[23] 阿比留は「フリースペースにおける「参加」支援の仕組み―日常的な「参加」を支える大人の役割―」『フィロソフィア』第94号，2006年，pp.105-117において，「社会変革的なものではないが，子どもが他者や外界との関係を変革し，形成していくプロセスを示している点で」参加を捉えている。

[24] ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウェンガー著／佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書，1993年。

[25] 教育思想史学会編『教育思想事典』増補改訂版，勁草書房，2017年。「状況的学習」の項目より。

[26] レイヴ，ウェンガー，前掲，p.10。

[27] 同上，p.10-11。

[28] 同上，p.12。

[29] 同上，p.30。

[30] 同上，pp.27-28。

[31] 同上，pp.44-45。

[32] 高木光太郎「『状況論的アプローチ』における学習概念の検討：正統的周辺参加（Legitimate Peripheral Participation）概念を中心として」『東京大学教育学部紀要』第32巻，1992年，pp.265-273。

[33] Wenger, E., Communities of Practice : learning, meaning and identity. Cambridge : Cambridge University Press, 1998.　訳は松本雄一「実践共同体概念についての一考察：E.Wengerの実践共同体論を読み解く」『商学論究』第64巻3号，2017年を参考にした。

[34] 同上，p.53

[35] 同上，p.58。

[36] 同上，p.62。

[37] 札幌市は2009年4月「札幌市若者支援基本構想」を策定し，これに基づき活力ある地域社会の実現を目的として，若者の社会的自立を総合的に支援するため，2010年4月に若者支援総合センター１館と若者活動センター４館を設置した。この施策の目標は「明日の社会を担う若者の社会的自立の実現」とされている。ここで「社会的自立」とは，「若者が，就業して親の保護から離れ，社会性を身に付けて公共に参画し，社会の一員として自立した生活を送ることができること」と定義されており，就職や親からの独立，結婚，家庭を持つというだけではなく，「若者自身で仲間づくりしたり，地域，社会などに自主的に参加しながら，社会性を身に付ける」ことが重要視されている。また，対象としては18歳から34歳までの社会的自立に向けて支援が必要なすべての若者を対象としている。その中で若者支援総合センターは「さっぽろ若者支援ネットワーク」の中核として位置づけられている施設である。引きこもりやニートなど社会生活を円滑に営む上で困難を有する若者に対する総合相談窓口を設置しており，臨床心理士やキャリアカウンセラーなどの専門職員を配置している。コミュニケーション能力の向上や就学，就職に向けた支援プログラムの実施や，就労支援機関や保健福祉機関等の紹介を行っている。また，若者活動センターは，若者の仲間作りやまちづくりなどの活動の支援や一般利用者も含めた貸室も行っている。なお，札幌市の若者支援施設5館は，公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会が札幌市より指定管理者として認可され運営を行っている。（札幌市『札幌市若者支援基本構想：次世代を担う若者の社会参加と自立に向けて』2009年より）

Exploratory Participation in the Youth Center : Focusing on the Lobby Space

OTSU, Emi

The purpose of this paper is to clarify the way of daily and diverse participation in youth center from the perspective of legitimate peripheral participation(LPP) theory. The author is aware that previous studies were based on the ladder theory of chirldren' s participation, creating a hierarchy and exclusionary process in youth participation. Therefore, I focused on the lobby space in Sapporo city' s youth center and conducted participant observation and interview survey. From the results of the survey, the meeting was positioned as the pinnacle of conflicts in daily practice. There were changes in consciousness and behavior through participation in various forms. In addition, it was confirmed that there was a gap in the membership between the youth who are users and youth workers. "Meetings", which are extraordinary to the usual way of lobby space, are not their participation in democratic decision-making fields, but rather their behavior and their meaning as a process of daily practice. It was an opportunity to come up with something. It was suggested that there is a shared awareness of how one interacts as a "public place" and "everyone's place", including not using the place much. From the above, the possibility of expanding the concept of "community of practice" for structure of youth work is suggested.

Key Words

participation, lobby space, youth center, community of practice, young people